

## 飼育経験は動物に対する共感性を育むのか

## 問題・目的部分の要約

ペットとよりよい関係をもっている中高年は、人生の肯定感や充実感が高いという調査結果が示されたことから、近年は、幸福感や充実感と、ペットの存在や、ペットを飼育することとの関連が注目されている。平（2017）は、人間と動物との関係について理解を深めるために、動物への共感性という概念を提唱した。そして、60歳代の男女を対象として、動物への共感性と幸福感の間に有意な関連性があることが確認されている。他方、動物に対する共感性の涵養については、平（2017）において飼育経験が影響する可能性が示唆されているに留まり、今後の検討が待たれる課題である。そこで本研究では、平（2017）による示唆、すなわち動物の飼育経験の有無と動物に対する共感性に関連が認められるか否かについて検討する。

## 方 法

## 調査時期および対象

東海地方にある公立普通科高校、私立普通科高校の2校で、いずれも2年生を対象として、2019年5月に調査を実施した。調査はクラス担任によってホームルーム等の時間を用いて行われた。調査への協力は任意であること、回答によって個人が評価されるようなものではないことなどを調査用紙のフェイスシートに記載し、同意者のみに回答を求めた。

## 調査内容

動物に対する共感性 平（2017）による動物に対する共感性尺度16項目を用いた。この尺度は、高校生を対象に作成されたものであるが、平・成実（2018）によって、60歳代でも同様の因子構造が認めら

れることが確認されている。感情面、情緒面での触れ合いを肯定する「感情的触れ合い」、相互に分か  
あいたいと希求する「相互理解希求」、動物にも基本的人権のようなものを認め、それに対する配慮意識  
を表す「権利への配慮」の3つの下位尺度で構成される。回答は平（2017）にしたがい、「はい」「ど  
ちらかといえば、はい」「どちらともいえない」「どちらかといえば、いいえ」「いいえ」の5段階で求めた。

飼育経験 自宅で何をいつからいつまで飼育していたかについて記入を求めた。なお調査用紙のフ  
ェイスシートには、本調査でいう動物とは、犬や猫、うさぎ、小鳥など人間に飼われている小動物をさし、  
トカゲなどの爬虫類や虫は含まないことを示した。

## 結 果

本調査は、206名からの回答を得ることができた。そのうち、データに不備のあった16名を除いた  
190名を有効回答者として分析に用いた。

はじめに、動物に対する共感性尺度について検討する。まず、回答の様子を度数分布、平均値、標準  
偏差などから確認した。平均値および標準偏差はTable 1に示す。特に大きな回答の偏りなどは見られ  
なかった。また平均値、標準偏差は、平（2017）の研究で示されている値と類似しているといえるだろう。

次に平（2017）の見出した因子構造との異同を確認するため、確認的因子分析を行った。因子と項目  
の配置的対応は平（2017）に従い、因子間に相関関係を仮定した。

確認的因子分析の結果をTable 1に示す。適合度指標は、 $\chi^2(101) = 1165.54, p < .01, GFI = .90, AGFI = .86, CFI = .92, SRMR = .07, RMSEA = .06$ であった。因子から項目へのパス係数は、最も低い  
もので.42であり、すべての係数が1%水準で有意なものであった。因子間相関は、「感情的触れ合い」  
と「相互理解希求」で.51, 「感情的触れ合い」と「権利への配慮」で.53, 「相互理解希求」と「権利へ  
の配慮」で.37であった。これらの結果を踏まえ、GFIなどでは必ずしも十分な適合度が示されていな  
いが、全体的に判断すると、本研究のデータにおいても、平（2017）の見出している因子構造とほぼ同  
様な構造を確認できたといえるだろう。なお、本研究における各下位尺度の信頼性係数を $\omega$ 係数で求め  
たところ、「感情的触れ合い」では.88, 「相互理解希求」で.77, 「権利への配慮」で.78であった。そこで、  
平（2017）と同様の手順で得点化を行った。調査対象者全体の各因子得点の平均値、標準偏差はTable  
2に示した。

次に、動物の飼育経験への回答をもとに、対象者を経験のある群と、ない群に2分した。飼育経験のま  
たくない者は91人、経験のある者は99人であった。飼育した動物は、イヌとネコが非常に多く、ハム  
スター、インコなどの鳥類がそれに続いていた。

Table 2には、飼育経験の有無別に、動物に対する共感性得点の平均値および標準偏差を示す。飼育  
経験の有無による動物に対する共感性得点の差に対して $t$ 検定を行った結果と、さらに効果量として  
Cohenの $d$ を記載した。

Table 2にみられるように、「感情的触れ合い」( $t = 2.51, df = 188, p = .013$ )で経験あり群となし群の間  
に5%水準の有意な差が認められ、経験あり群の方が高い値であった。Cohenの $d$ は、「感情的触れ合い」

Table 1  
動物への共感性尺度の確認的因子分析結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	感情的 触れ合い	相互理解 希求	権利への 配慮
10 動物と人間は友達になることができる	3.06	0.70	.69		
4 私が悲しい時には、動物はそれを分かってくれる	3.06	0.72	.79		
1 動物の顔を見ると、その動物が何を考えているのか分かる	3.57	0.76	.60		
13 動物に触れていると癒される	3.08	0.76	.71		
16 人間と動物はお互いにわかり合える	3.13	0.79	.53		
7 動物と一緒にいるとさびしさがまぎれる	3.40	0.67	.62		
2 動物の気持ちが分かるようになりたい	3.32	0.77		.67	
11 動物は人間に気持ちを分かって欲しいと思っているはずだ	3.54	0.73		.50	
5 動物に私の気持ちを分かって欲しいと思う	3.63	0.68		.67	
14 動物の言葉を話せるようになりたい	3.88	0.74		.52	
8 動物の鳴き声を、人間の言葉に翻訳できれば良いのと思うことがある	3.47	0.77		.61	
6 動物にとっては、人間に飼われているよりも、自然の中で暮らしている方が良い	2.86	0.65			.73
15 飼っていた動物を捨てることは絶対にしてはならないことである	3.37	0.76			.77
3 鎖でつながれたり、檻の中に入れられた動物を見るとかわいそうになる	2.78	0.66			.51
12 飼われている動物はその家族の一員である	2.89	0.66			.48
9 人間は動物を大切にしなければならない	3.11	0.61			.42
因子間相関	感情的触れ合い 相互理解希求			.51	.53
					.37

Table 2  
動物への共感性各下位尺度得点の飼育経験による比較

	全体 ( <i>N</i> =190)		経験無 ( <i>N</i> =91)		経験有 ( <i>N</i> =99)		<i>t</i>	<i>p</i>	<i>d</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>			
感情的触れ合い	3.22	0.53	3.12	0.53	3.31	0.52	2.51	.013	0.36
相互理解希求	3.57	0.51	3.60	0.52	3.54	0.51	0.81	.419	0.12
権利への配慮	3.00	0.46	2.98	0.49	3.03	0.44	0.71	.476	0.11

で最も大きく 0.36, 「権利への配慮」が最も小さく 0.11 であった。いずれの値も低く、飼育経験による動物への共感性の差は小さいといえるだろう。すなわち、動物の飼育経験は動物への共感性の「感情的触れ合い」と有意に関係しているが、その関係は弱いといえよう。

(以下、略)